Online publication March 19, 2010

巨星墜つ　心臓血管外科医の父－ Dr. Michael E. DeBakey

中野　　赳[1, 2]

Dr. DeBakey は 100 歳の誕生日をあと 8 週間で迎えようという 2008 年 7 月 12 日に永遠の眠りについた。2006 年 9 月に彼の専門の一つである急性大動脈解離に倒れ，手術で回復し，現役復帰した後のことである。その死因は Baylor 医科大学の公式発表では natural causes であるとしている。

彼は 23 歳で Tulane 大学を卒業して以来生涯現役として医療・医学に携わって，以後これだけの業績を上げた巨人はもう今後出ないであろう。

私は Dr. DeBakey とは少なからぬ縁があり，感無量である。

私は，1971 年から 2 年間 New Orleans の Tulane 大学でレジデントとして過ごした。その頃の米国南部における心臓病学の 2 大巨人は，内科では Tulane 大学の心電図で有名な Dr. G. E. Burch であり，外科では Houston の Baylor 医科大学における Dr. M. E. DeBakey であった。二人とも 1930 年代に Tulane 医科大学卒業であり，また，本日本脈管学会での Honorary Member でもある。

1974，75 年ころ急性大動脈解離に興味をもっていた時期がある。血液が大動脈の真性腔が破れて偽腔へ出ていく口(解離口)を exit ではなく entry といい，更に偽腔に出た血液が真性腔に戻って来るのを return back(entrance)ではなく re-entry という，何となくおかしい。それはそれとして，その分類は解離口の存在部位により DeBakey の I，II，III 型というが，当時，解離は一般的に血流の進行方向に進む(順行性)ものと考えられていた。しかしながら，大動脈造影にて明らかに逆行性にも進んでいる症例を見つけた。英文論文として報告しておかねばと思っていたら，2 年程して Stanford 大学より逆行性解離例の報告があり，自業自得ではあるが悔しい思いをしたことがある。

1979 年より，旧知の Baylor 医科大学の内科 J. K. Alexander 教授のもとへ後輩 10 人を短期留学として 3 カ月ごとに送り込んだことがある。その後，少し間があくが，私が教授になってから Alexander 教授と相談の上，三重大学と Baylor 医科大学を正式に姉妹校として提携することにした。種々の交渉，手続きの後，1992 年その調印のため Baylor 医科大学に出向いた際，出迎えてくださったのが能勢之彦教授であり，調印してくれたのが時の Chancellor（総長）DeBakey 教授であった(**Fig. 1**)。能勢之彦教授は DeBakey 教授の招請により Cleveland Clinic より Baylor 医科大学に赴任された直後であった。能勢教授ご夫妻には現在まで三重大学の教室員ともども口では表現できないほどお世話になっており大変感謝している。非常に日本人の面倒見がよく，本学会員の多数の先生がお世話になっておられるかと思われる。

それ以来 3 度 DeBakey 教授とは彼の部屋でお会いしているが，彼は非常に親日的であり人間的にも優れ，あれ程偉大な先生が人間関係を重視し，毎年私の所へ New Year Card を送ってくれていた(**Fig. 2**)のには感激していた。

以下，M. E. DeBakey 教授の偉大な業績の一部と簡単な略歴を記す。

Dr. Michael E. DeBakey は 1908 年 9 月 7 日レバノン系移民の子として米国 Louisiana 州 Lake Charles にて生まれた。彼の姓は初め Dabaghi であったが英国式に DeBakey と改めた。

1932 年 New Orleans の Tulane 大学にて BS を，1934 年には MD の資格を得，学生中に roller pump を考案し，それは 20 数年後人工心肺(heart lung machine)のもとになり，開心術の時代を切り開いた。インターン，レジデントを New Orleans の Charity Hospital にて過ごし，その後，フランスの Strasburg とドイツの Heidelberg にて更なるトレーニングを受けた。1937 年には Tulane 大学の職員となった。現在世界的に問題になっている喫煙と肺がんの強い因果関係について，彼の指導医とともに世界に先駆け指摘し

[1]三重大学名誉教授
[2]山本総合病院顧問

2010 年 1 月 18 日受理

Figure 1　1992 年当時の Dr. DeBakey（左）と著者

Figure 2　Dr. DeBakey から送られた New Year Card

ている。1942 年第二次世界大戦時アフリカ，ヨーロッパ戦線に外科医として従軍し，その後，朝鮮動乱の際，移動式陸軍外科病院（Mobile Army Surgical Hospital: MASH）を創り，更に , 現在の陸軍における退役軍人部門を創設した。

Dr. DeBakey は 1948 年 Houston の Baylor 医科大学の外科教授として招聘されて以来 60 年間世界の心臓血管外科領域で現役の第一人者として活躍した。1969 年から 1979 年まで学長として，1979 年から 1996 年まで総長として，それ以降は名誉総長として大変活躍した。1981 年に Olga Keith Wiess Professor of Surgery，1985 年には Director，DeBakey Heart Center も併任した。

彼の教育者としての功績の最も偉大なことは，一言で言えば，Baylor 医科大学を三流大学から世界の一流校におしあげたことに尽きる。

外科医としての仕事は，心血管系の外科治療―胸部大動脈瘤の手術と人工心臓・臓器移植とに集約できる。

1953 年，世界最初に頸動脈の内膜摘除術に成功し，脳血管障害の外科的治療に道を開き，更に彼の作成した Dacron grafts はそれにて 血管を置換することにより近代血管外科への道を開くことになった。この頃，胸部大動脈疾患の外科的治療に力を注いでいる。その一端として，前述の大動脈解離における DeBakey 分類もある。1963 年人工心臓の開発として連邦政府から助成を世界で初めて受けている。1964 年，vein graft による冠動脈バイパス術に初めて成功した。1966 年には不全心に対して左心補助装置の移植に成功した。臓器移植に関しては，初めて 1968 年に一ドナーから四人のレシピエントにそれぞれ心臓，2 つの腎臓，肺を一時期に移植することに成功した。以後，彼の後輩らは種々の ventricular assist device を作成している。完全な植え込み型人工心臓の作成は彼の求めた最後の夢と思われるが，その研究は能勢之彦教授に受け継がれ精力的に研究されつつある。

Dr. DeBakey は米国政府の政策に対しても NIH を通じて大きな貢献をした。

1969 年，彼の一番弟子である Dr. Denton Cooley とは両者の考えの不一致から袂を分かち，Cooley は DeBakey のいる Houston の Methodist 病院（Baylor 大学関連）から道一つ隔てた St. Lukes 病院（Texas 大学関連）へ移り Texas Heart Institute を作った。このことは当時 Life 誌にも大々的に取り上げられた。二人の競いあいは 30 年弱続いたが，2007 年氷解した。

1996 年に DeBakey 教授の率いる米国医師団がロシアの Boris Yeltsin 大統領に冠動脈の 5 枝バイパス術を成功させたのはまだ記憶に新しい。

DeBakey 教授は 1,400 以上の原著があり，200 以上の賞を受け，生涯を通じ心血管疾患の外科的治療のパイオニアとして貢献した。彼の肉体はここに眠ったが，彼の夢は永遠に若い人に引き継がれてゆくことであろう。

日本脈管学会設立 50 周年，「脈管学」通巻 50 巻を記念して，近代世界心臓血管外科学の偉大なパイオニア DeBakey 教授の足跡を若い人に知って頂き，記録に留めるのも意味のあることと考え紹介させていただいた。